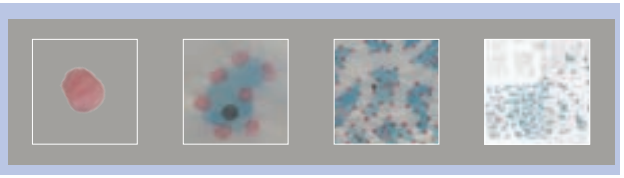
都市からのイメージ / イメージからの建築
異化時間観光都市鎌倉

21U1141 福島 将洋

2022 年度　修士設計
法政大学院デザイン工学研究科建築学専攻
下吹越武人研究室

1. 研究背景
建築イメージの発生と反映のプロセスの追究

たとえば、ドットから建築を考えてみる。
ひとりの人をひとつの点に置き換えると、現実を超えた自由な建築イメージを得ることができる。設計においてイメージは飛躍的に考えを進めてくれる一方で独りよがりにもなりかねない。では、どのように現実の都市からイメージを形成し、建築に活かせるのか。この疑問に対してイメージの発生と反映のプロセスを追究していく。

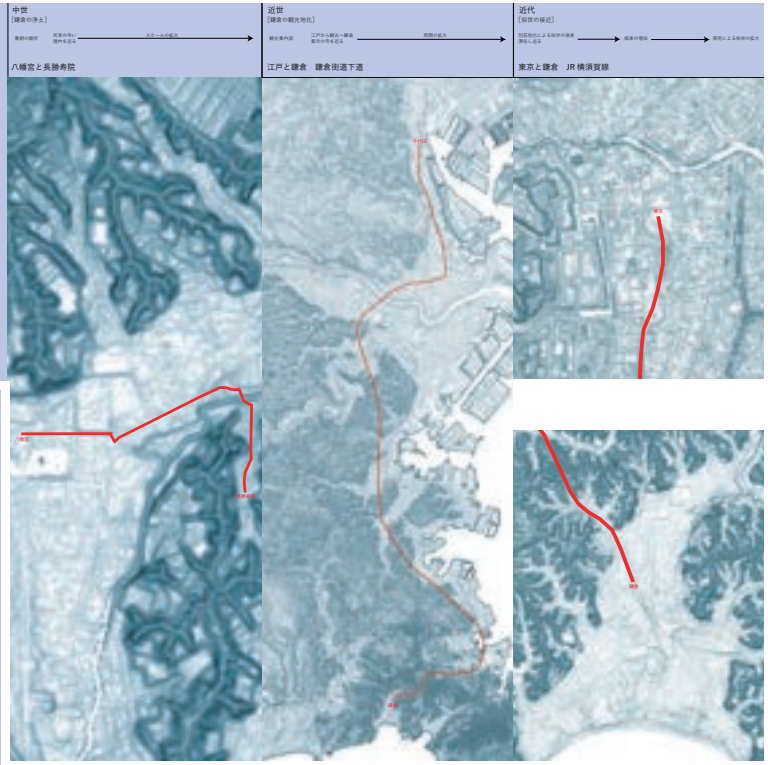


2. 計画の意義
観念の共有による異化時間都市

建築のイメージには様々な局面がある。
磯崎洋一の「アンビルト」では、イメージはドローイングであり、建たないことを前提にすることで、革命的に強い批判性を持たせることができる。
磯崎新の「空間へ」では、ザハのドローイングに対して発生状態のイマージュと呼称し、純粋な形態を表現した状態としている。
エイドリアンフォーティは「言葉と建築」のなかで、ドローイングと言葉は建築を伝達する上で相互補完の関係にあるとし、どちらも建築のもつ観念を共有するためのものと説明する。
香山壽夫の「かたちことば」は建築の形態がもつ意味や効果を言語のように扱っている。
これらのいずれにもイメージは漂っている。建築のイメージとは場所から特有の観念を読み取り、それを建築で強調 / 抑制することで訪れたひとに共有するプロセスであると考える。本論では場所の持つ観念を他人と共有することを、それぞれ個人がもつ生活時間をその場所のもつ時間軸に調速することと捉える。日常とは異化された空間体験の連続はもう一つのちいさな日常になる。その異化された日常は現在を生きる誰かにとってかけがえのない時間だと考える。

3. 計画概要
避難所としての鎌倉観光

観光は日常の避難と考えることができるのではないか。
鎌倉における観光の起源は、八幡宮と谷戸の長勝寿院の関係だと考える。
当時の政治の中心の時間と、死者の静謐な時間が、谷戸を境に隣り合っていた。
時代の中心が江戸や東京に変化しても、鎌倉には現代とは異化された時間が流れ続けており、それを求めて人は観光に来る。
それはある意味、日常生活からの避難である。避難するとは鎌倉にきて特有の歴史的都市体験をすること、すなわち異化された時間のトレースをすることだ。
このプロジェクトでは異化された時間へのトレースを引き起こす建築、およびアクセスする時間軸を拡張するプログラムの提案であり、これにより鎌倉観光文化の根源的な意味を再構築し、かつ現代社会から異化された時間を体験できる避難所としての観光都市の在りかたの提案である。



4. 都市分析
鎌倉谷戸の浄土世界

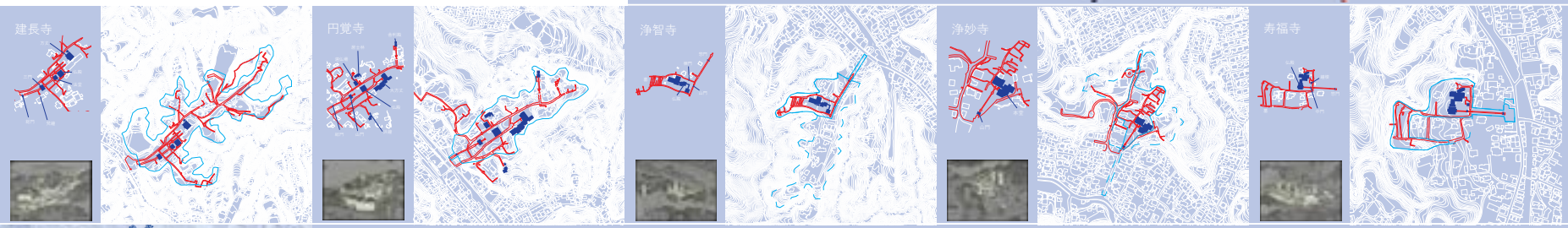
鎌倉の都市は源頼朝が幕府を八幡宮に置くことから始まった。
もともと長谷の海近くにあった八幡宮を今ある鎌倉の奥地に配置し、
若宮大路という軸線を配置したことで政治の中心としての都市ができた。
八幡宮の次に行ったのが長勝寿院を東側の谷戸に建立したことである。
この寺は頼朝の父・義朝を弔うために大御堂ヶ谷を勝地として選定した。
当時の頼朝は鎌倉の谷戸に死者を弔う場所としての土地の雰囲気を読み取り、
浄土の世界を寺として作った。
その後にも鎌倉五山をはじめとし、さまざまな寺社が谷戸に建てられた。
平野部は八幡宮を中心とした行政と小町大路周辺の生活という俗世があり、
都市のエッジである谷戸には浄土世界の寺が位置されている。

4-3. トレイルによる地勢の再生

鎌倉都市の歩くと図の経線で示すように谷戸から谷戸へ都市を横断することにより多くの異なる時間領域を行き来することができる。
この行き来こそが、俗世と浄土が近接し現代の鎌倉ならではの特性であり、異化した時間へのアクセスが鎌倉の観光をより根源にアップデートすると考えた。
プログラムとして建築に機能、都市の役割、番頭を設定した。
機能は現代の鎌倉観光に不足している宿泊関係の機能を分散配置し都市を移動することで宿泊が完結する。
都市の役割としては、トレイルの中で時間領域のエッジや交点などに塔や門や堂となる建築を配置する。これらは建築では鎌倉の失われた都市性を見つめなおす空間体験がおこる。
番頭は各建築を運営し働く人であり、観光者の日常生活とは異なった現代を生きる人々を設定している。番頭との空間共有は、鎌倉のトレースを過去だけでなく、未来やマイノリティの現代まで幅を広げ観光をアップデートする。

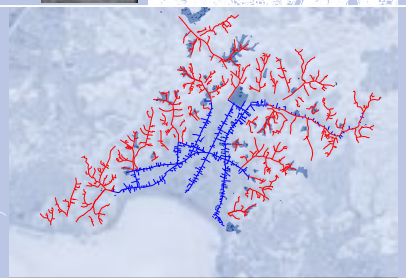
4-1. 鎌倉五山の境界の乱れ

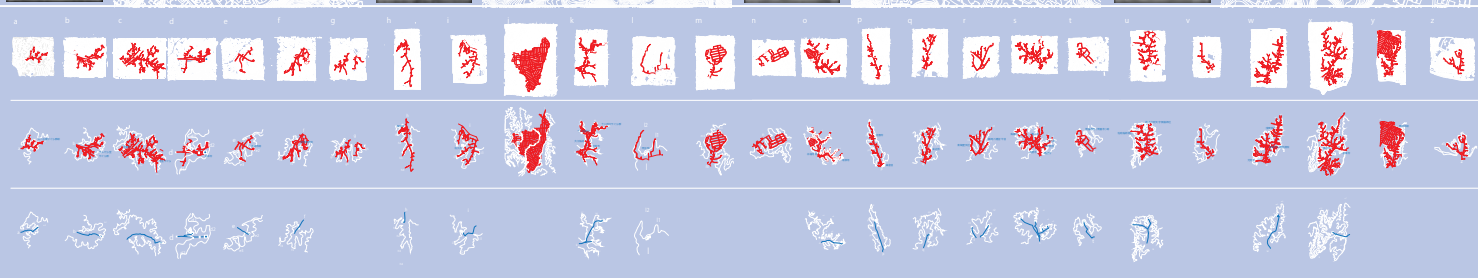
鎌倉で一番普及した禅宗建築の伽藍をみることで、当時の鎌倉の都市性を明らかにする。
現代の伽藍配置を鎌倉五山へ見に行くとどこからが寺の敷地なのか曖昧に思えることがある。
寿福寺では総門をくぐった後に一般の住宅が何件も出てくる。
明治に描かれたであろう相模国鎌倉名所及江之嶋全図で五山を見てみると、
この時期までは谷戸全体に寺の領域があったことが読み取れる。
その後住宅地化が進むと人がどんどん流れ込み、寺の結界の中にまでも
住宅が侵入してきたことが読み取れる。
格式の高い建長寺と円覚寺は健全な状態で存続しているが、
浄智寺、浄妙寺、寿福寺は結界が乱れていることが確かだ。



4-2.谷戸と寺と道の意味

鎌倉五山の結界の揺らぎから中世の寺の浄土の世界観と現代の住宅地の俗世が近接しつつあることがわかった。より視野を広げて他の谷戸ではどのような状態にあるのか調査してみた。
すべての谷戸に対し、かつての浄土世界観の中心であった寺社の配置や、そこへ至る道、そこを囲う谷戸の形などからかつての寺の結界を読み取る。
右の地図で青く示しているのが読み取った領域とそのコアである。





5. 設計研究
都市から異化時間をトレースし、共有するための建築の探求

5-1. 都市の中で時間をトレースする

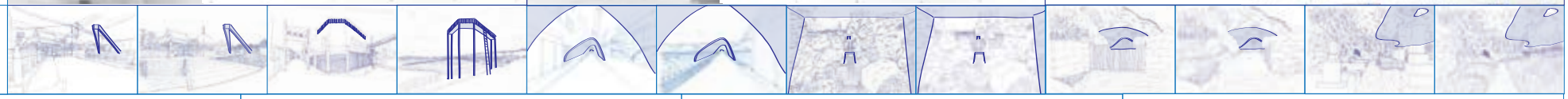
［都市風景のダブルイメージ］
鎌倉都市に関するいくつかのリサーチをしたのちに街を歩くとかつての街の様子を感じる場面がいくつかあった。それは街中で視界の遠くにある谷戸の緑が風に揺れたとき、街中にある寺を見たとき、隠蔽となっているであろう曲がった道を歩くとき……鎌倉は寺、道、地形といった歴史的不変の要素をたくさん持っている。これら要素からかつての時間をトレースすることが可能であることが現代鎌倉の持つ特性だと考える。
このスケッチのようなに過去と現在異なる時間の都市風景を生活や観光体験を通して感じることが、鎌倉の独自の体験なのである。

5-2. 現代の塔・門・堂による地勢のトレース

［建築の形態イメージ］
建築によって現代の街並みと過去の風景を結び付けられないか。
町を歩くなかで門や塔と堂という建築の形態によって風景を想起させられるのではないかと考えた。
同時に、都市における形態の体験をコマニにて記述した。都市から建築を読め、建築内部での人との対話による共感によって、再び都市に出てゆく時には町の見え方は変化するのではないだろうか。

5-3.形態による想起される風景

［形態の原型をダブルイメージに挿入する］
各形態の原型を都市のダブルイメージに書き込んでみる。
書き込む原型はそれぞれのシーンごとに変化していく。
現代の都市の景観と過去の景観が建築の形態を媒介にして想起することを示したドローイング。



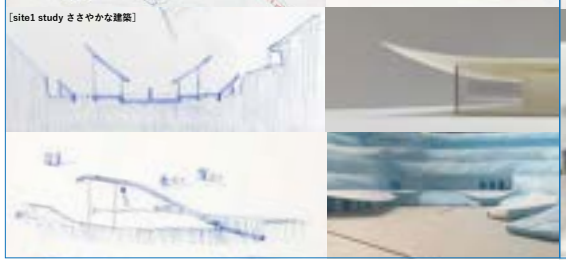
5-4. site1 中心の欠けた谷戸

廃寺になり領域の中心がない谷戸に対し、堂をつくり新しい中心とするのではなく、
今ある地形から新しい中心を見つけ、顕在化させることにより谷戸自体に堂としての意味を与える。そんな建築を考える。
敷地のジオグラフィから、ヴォイドを記述すると点ではない有機的な中心の形がえられた。
中心をパさなランドスケープで示し、地形に負けるようなささやかな建築によって際立たせることで、
既存の谷戸に中心性がうまれ、谷戸が持っていた胎内的な雰囲気は再生される。

［site1 study 中心を感じる］

［site1 study 中心はどこにあるのか］

［site1 study ささやかな建築］



5-5. site2 意味を失った道

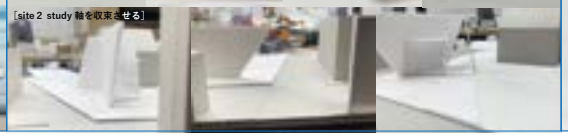
谷戸の奥へと続く道、その入り口であるこの場所では総門のような谷戸の入り口を示す建築を考える。若宮大路から垂直に伸びた道はこの地を境に少し向きを曲げ、谷戸の奥の廃寺へと道が続く。
道が曲がっているのは奥へ行くまでに地形が干渉しているため、それを迂回しているのだ。
この道のズレに着目するだけで、谷戸の奥に寺があり、谷戸手への道は地形によって曲がっているという鎌倉の特徴が感じられる。
谷戸に中心を与え谷戸の入り口を再定義することで参道的道の意味は再生する。

［site 2 study 軸のズレを感じる］

［site 2 study 軸の軌道を曲げる門］

［site 2 study ズレを可視化する］

［site 2 study 軸を収束させる］



5-6. site3 俗世的観光の中心地

小町通の一角であるこの地は現代の俗世的な観光を一番感じる場所だ。観光者による人混みからは都心の時間を感じる。
この塔を登る中で現代の都市の眺めと変わらぬ鎌倉の風景を同時に俯瞰することでより実感として時間のトレースができる。

［site 3 study 現代を俯瞰する］

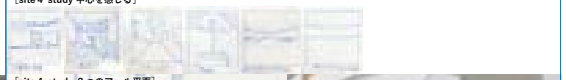
［site 3 study 立体的な軸の集合］

［site 3 study 現代から離れ現代を切り取る］

5-7. site4 囲いの欠けた中心

神社の境内にあるこの敷地は滑川に面しており、鳥居から神社へ続く参道が折れている。
折れている地点に立つと神社、御神木、神興に囲まれ、そこが場所の中心であることがわかる。
この中心に対して地形の代わりに建築が囲うような関係を作ることで、町の中に小さな谷戸が発生する。
屋根によって作られた中心に来た観光者は、建物内にいると滑川に開かれた風呂に入る。
下流の先には次のトレイルがあり、向かいの妙本寺の谷戸へと続いている。

［site 4 study 中心を感じる］



［site 4 study 2つのアール平面］

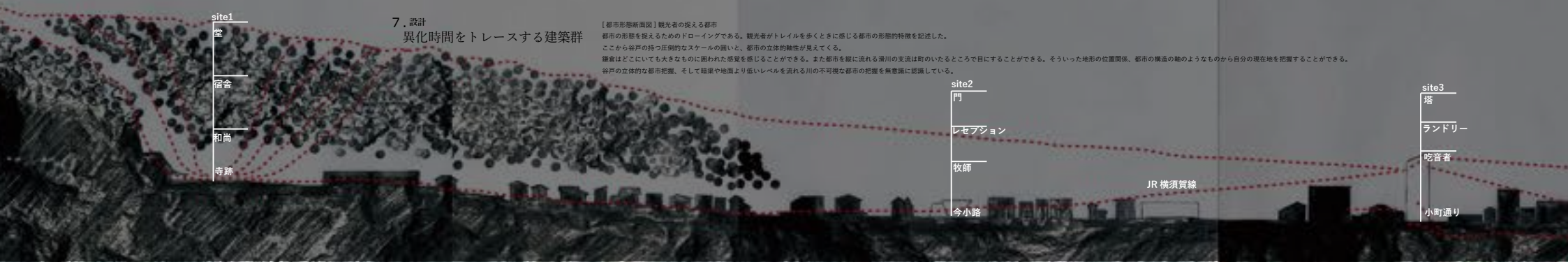
［site 4 study 象徴と囲いの屋根］

6. プログラム
都会の時間から零れ落ちそうな観光者を療養する異化時間トレイル

［都市形態平面図］トレイルの全体性
街並みをよく見ると地形に応じて特徴がある。
谷戸部は塀に囲まれた建物がほとんど、小町通り周辺は商いのため小さな建物が密集している。小町大路には古くからの寺町としての名残が見受けられ、旗竿敷地が多い。
両端の谷戸部に行くと地形による大きな囲いを感じる。その代わり、建物一つ一つの敷地が大きく庭などもあり空間的に広がりも同時に感じることができる。
この地図では谷戸も建物も等価に地形として扱っている。建物を地形と捉えると、平野部も強い閉塞感による囲いを感じる。それは小町通りの密集したヴォリュームや、若宮大路沿いの大きなヴォリューム。
そして今小路や小町大路など生活動線と観光動線の混合による車の渋滞、小町通りの人混みなども一種の囲いと考えられる。
囲いと軸性こそが鎌倉の都市性を読み解く要素であり、それを建築によって顕在化させることによって、訪れた観光者が都市の構造に気づき体感することで、その場所がもつ時間軸をトレースすることができるのではないだろうか。

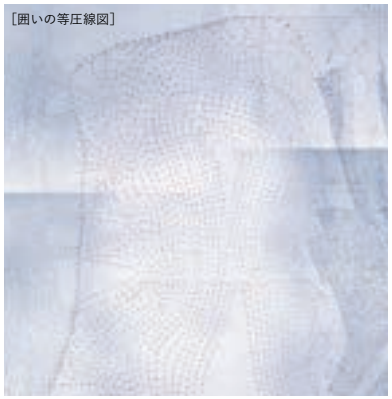
7. 設計
異化時間をトレースする建築群

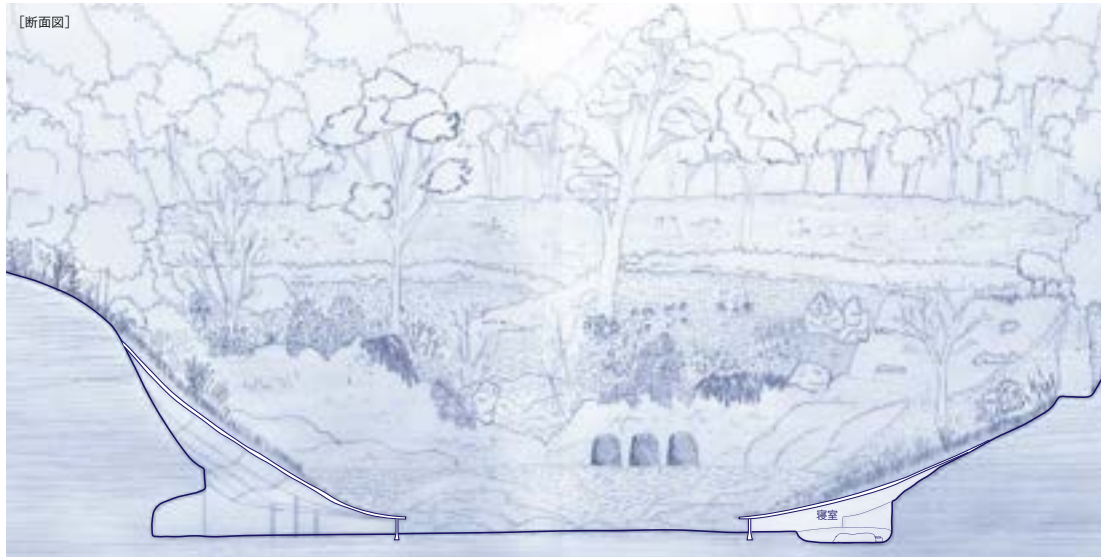
［都市形態断面図］観光者の捉える都市
都市の形態を捉えるためのドローイングである。観光者がトレイルを歩くときに感じる都市の形態的特徴を記述した。
ここから谷戸の持つ圧倒的なスケールの囲いと、都市の立体的軸性が見えてくる。
鎌倉はどこにいても大きなものに囲われた感覚を感じることができる。また都市を縦に流れる滑川の支流は町のいたるところで目にすることができる。そういった地形の位置関係、都市の構造の軸のようなものから自分の現在地を把握することができる。
谷戸の立体的な都市把握、そして暗渠や地面より低いレベルを流れる川の不可視な都市の把握を無意識に認識している。

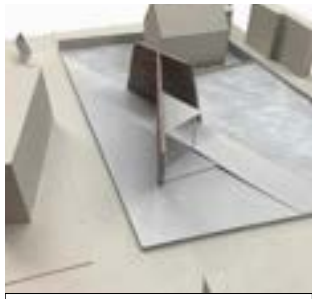


7-1. site1 死者の時間のトレース

この建築は石板の大屋根でできている。
谷戸の地形と一体となった屋根に沿って歩くなかで、横穴式の墓であるやぐらのヴォイドに漂う雰囲気や木々の揺れから谷戸に吹き込む風などを感じる。
こういった地形の持つ些細な圧のようなものから谷戸の囲いを感じ取れる。
この場所は観光者にとっての寝室でもある。
寝室はやぐらと同等に考え谷戸に横穴を掘り屋根を架けた空間である。
やぐらと同様に谷戸の土の中で眠りヴォイドを囲うことで観光者は死者の世界に近づき時間をトレースする。

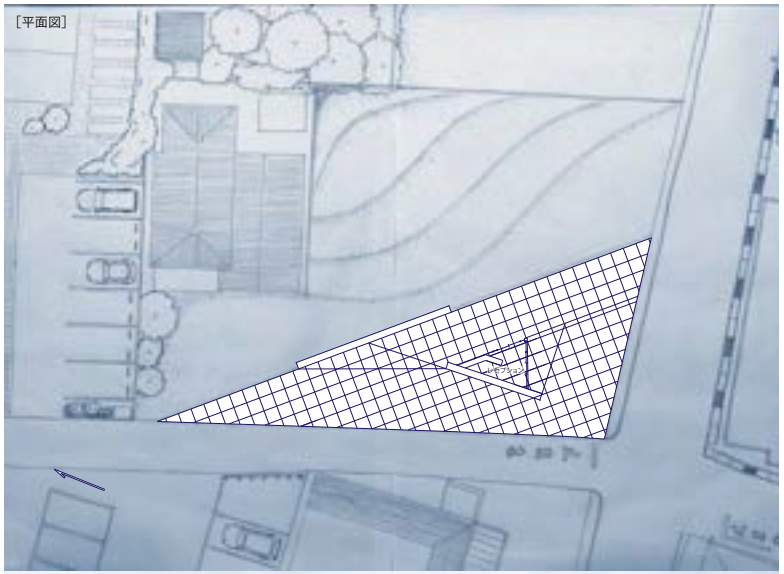


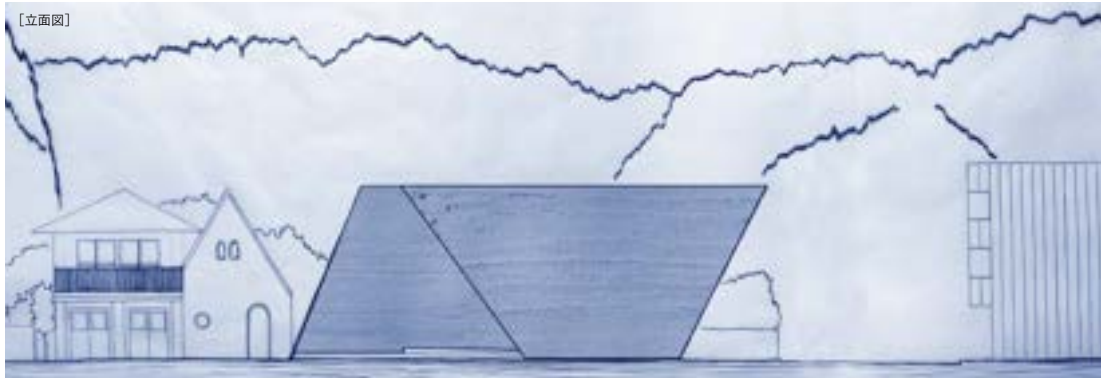




7-2. site2 ズレによる道の意味の再生]

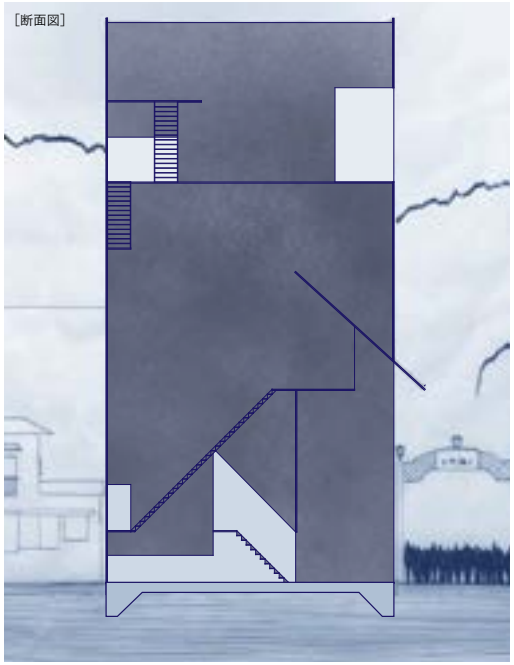
地形的に谷戸の入り口であるこの地は２つの軸のズレの場所である。
若宮大路から谷戸へ向かうためには谷戸を迂回する、必要がありこの地で道が折れている。なぜ谷戸へ道を引いたのか考えると、かつて寺があったからだ。つまりこの道は寺へと向かう参道の延長としての意味があったことがこの軸のズレから読み取れる。
この軸のズレを観光者が感じることが、この土地の地形、歴史、意味の理解へ繋がると考え、ズレを強調する２枚の壁の建築を設計した。
１枚は既存の若宮大路から垂直に伸びる軸の強調の壁。１枚は軸を曲げて繋げるための壁。壁は遺構発掘の廃棄土を利用した版築でできており、特有の模様に沿って歩くこと、テクスチャにより当たる光、ズレは現れ認識することができる。
またこの建築はレセプションになっており、site1 の寝室への受付である。寺の入り口に総門があるように、谷戸の入り口にレセプションがある。番頭として隣接する教会の牧師が応接してくれる。観光者は牧師の服装や受け答えの中で人となりを感じ、宗教の時間を共有する。

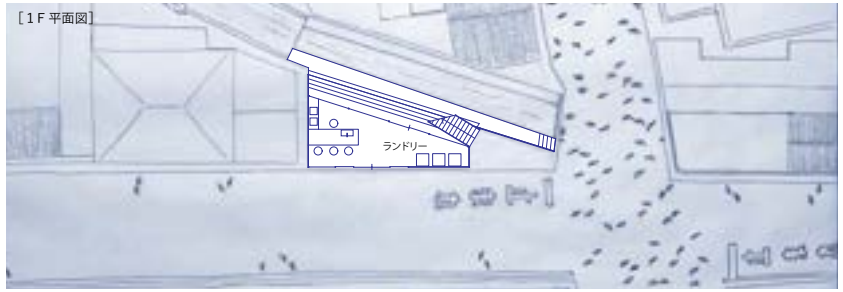


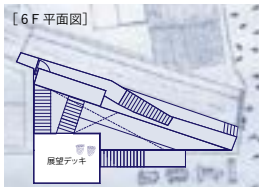


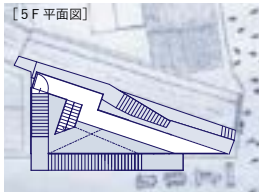
7-3. site3 物理的 / 時間感覚的に距離を置く

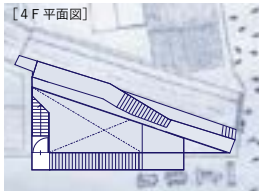
この場所は鎌倉で最も人混みのある小町通りの街角にある塔である。
ここは観光者にとってはランドリーであり、その洗濯の時間に審頭である吃音者とお茶をし、鎌倉について紹介してもらう建物だ。
吃音者は現代を生きると同時に特有のゆっくりとした時間を生きている。塔の縦方向に間延びした空間は時間を停滞させ、内装仕上げであるコールテン鋼の細かなざらつきはさらに時間を分解する。
塔に開けられた開口からは現代の鎌倉の断片を望むことができる。
小町通りの都心に近い現代的な時間から、吃音者と共に塔を登り、物理的にも心理的にも距離を取ることで現代の日常を生きる自己の時間を俯瞰してみる直すことができる。この建築はそんな現代の時間からの避難タワーとなっている。

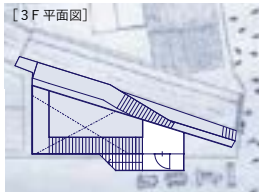


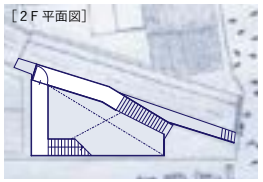


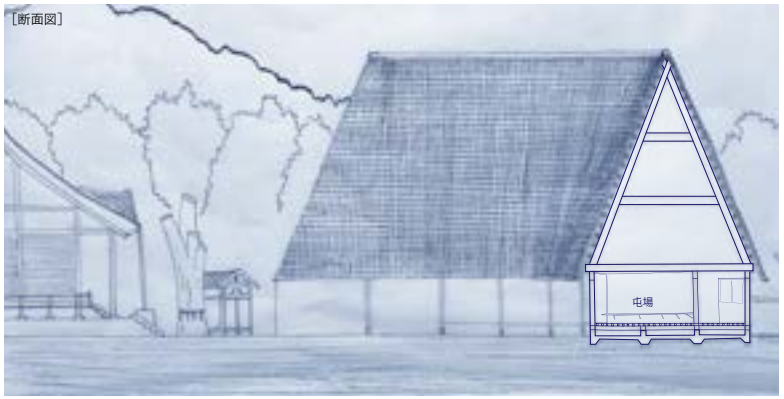
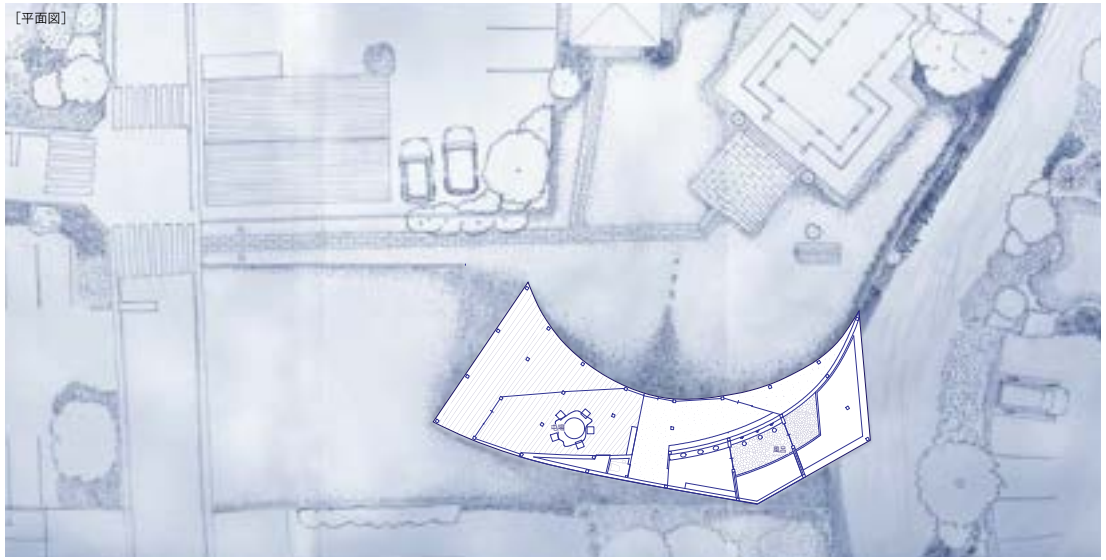
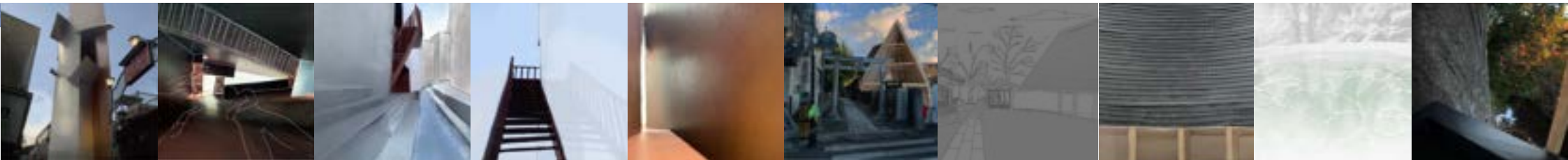










7-4. site4 孤独であることの共有

かつて鎌倉の鬼門の鎮守として建てられた神社の移設先であるこの地は、旗竿敷地で滑川に面している。鎮守の意味をもつ夷童は別の場所に離れており今は役割を失った神社だ。欠けた堂による囲われた領域の再生と共に、この建物は地域の独居老人のための屯場、観光者にとっての風呂場としての役割を与える。そこは互いに孤独である共通の境遇のものが、同じ湯に浸かることで互いの時間を共有できる場所である。神社の伽藍はその地形の影響で参道が折れている。その場に立つと、拝殿、御神木、神輿庫など囲いを感じる場の中心を読み取ることができる。ここに、不足している
童を建て、境内の領域を再生するために囲いを作る。建築は２つのアールでできている。一つは境内の中心を囲う屋根。これにより境内の囲いを満たす。もう一つは空間を滑川へと一体化するための開け切り壁。囲った領域を建築を通して川へと繋げる。川の流れは町の見えないパスとなっており下流には妙本寺 - 本覚寺間のトレイルに接続する。